

二〇二六年度（令和8年度）

横浜女学院中学校

B 入学試験問題

令和8年2月1日（午後）

国

語

注意

- 1 指示があるまで開けないでください。
- 2 問題は、24ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 時間は50分です。

受験番号

氏 名

— 次の文章の——線①④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにしなさい。また、文章中の漢字の間違いまちがを1か所ぬき出し、正しい漢字に直しなさい。

現在の横浜女学院では、高校二年生時に「総合セミナー」として京都と広島を訪①れています。「総合セミナー」は稽古けいこ照今しやうこんの——過去を見つめ、今を見つめ直す——旅として七十年以上前から始まりました。訪問場所は時代とともに変化してきましたが、その精神は変わらず今も受け継つがれています。神社ブツカクなどの数百年の時を経て今に伝わるものから、平和記年資料館や原爆げんぱくドームといった、まだ百年も経過していない歴史を語るものまで、過去を学ぶための場所を京都、広島それぞれで幅広く訪れます。机きじょう上③でゲンミツに学びを深めるだけでなく、現地に行くことで歴史を学び、未来を展望④する。そうした機会として「総合セミナー」はあります。

二 次の文章は、西村すぐり『ぼくはうそをついた』の一節です。広島に住む小学五年生のリヨウタは、タヅさんが、1歳年上の憧れの先輩であるレイの曾祖母だということをとあることから知りました。タヅさんは時おり、記憶が曖昧となり亡くなつたはずの息子のシヨウタをさがし歩いているため、子どもたちから変人扱いされていました。ある日、シヨウタをさがしていたタヅさんが行方不明となりました。それを心配したリヨウタとレイは、タヅさんをさがし、河原でタヅさんを見つめます。問題文は、レイが発見の知らせをするため河原を離れ、リヨウタはタヅさんと二人になった場面からです。次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。）

リヨウタは、タヅさんとふたりだけになった。河川敷は、ふかいすりばちのそこによこたわる、ほそながい、うすやみの世界だった。むかし、この広場でも原爆で死んだひとをやいたのだろうか。シゲルじいちゃんは、骨はべつの場所に埋めなおして慰霊碑をつくつたといっていたけれど、ひろいわすれた骨がのこっているかもしれない。リヨウタは、Aがすくんでうごけなくなった。

「シヨウタか」

のびした首のさきで目をまんまるにして、タヅさんがいった。リヨウタは、じぶんの名前をよばれたと思ってへんじをした。

「はい」

タヅさんはつえをほうりだしてリヨウタにかけより、いきなりぎゅっとだきしめた。リヨウタはびっくりして手をつ

ばった。はずみでタヅさんは、しりもちをついた。くらがりでもわかるくらいに、なきだしそうに顔がゆがんだ。それで①
もかまわず、タヅさんはひざをついてリヨウタの手をとった。

「ごめんね。おそうなつて。かあちゃんがなかなかみつけれなかったけえ」

あやまったのはタヅさんだった。

シヨウタは死んでしまったと、リヨウタは、いえなかった。

「シヨ、シヨウタです」

リヨウタはうそをついた。声がふるえた。タヅさんはリヨウタのうでや足をやさしくなで、体をみまわした。

「やけどは。けがは。いたいところはないか」

「ありません」

リヨウタが I とこたえると、タヅさんはうれしそうに、なんども、なんどもだきしめた。

「無事^{ぶじ}じゃったか。ようかえったねえ。えらかったねえ」

つめたかったタヅさんの手が、しだいにあたたかくなっていった。リヨウタは、タヅさんをたすけて立ちあがらせた。

「ごめんなさい。つきとばして」

「ええんよ、ええんよ」

(中略)

「さむくないですか」

かたほうの手はタヅさんとないでいたので、リヨウタは立ちあがって、あいたほうの手で肩かたかけをなおしてあげた。タヅさんは、エツエツと声をつまらせて、ちいさなきこえをもらした。こまったリヨウタは、じぶんのマフラーをはずしてタヅさんの首にまいてあげた。

「あったかくなった？」

リヨウタは、タヅさんのよこにすわった。ぴったりとくつついたうでや足から体温がつたわってくる。

「やさしい子じゃ」

タヅさんは、にぎる手にちからをこめた。

※₁
「ミノルさんとは、なかよくやっとなるか」

「えっ？」

リヨウタはききかえした。

「いっしょに中学へかようとったじやろう」

そうだった。シヨウタとミノルは、同級生なのだ。

「はい、いつもいっしょにあそんでいます」

うそがひとつふえた。リヨウタは胸むねがどきどきした。

「つらいことはないか？」

「ありません」

「そうか。友だちがおるならあんしんじゃ」

タヅさんは、つないだ手の上から、もうかたほうの手をかさねてにぎった。リヨウタの足さきがこつんとつえにふれた。リヨウタはあいた手でつえをひろい、タヅさんに手わたそうとした。

「もういつてしまうんか」

タヅさんは、Ⅱとしたようすで、うでにしがみついてきた。リヨウタは、タヅさんのことばの意味がよくわからな^②かった。

「しんじとうなかった」

タヅさんはいった。

「※2 きんろうほうしき勤勞奉仕先^{※2}にや遺体はなかつた。全身にやけどを負うて死んだと、ひとづてにきかされたが、かあちゃんはぜったいしんじんかつた。シヨウタは、どこかの救護所^{きゆうごしょ}でかならず生きとると、しんじてさがしたんよ」

リヨウタは、なにかこたえてあげたかったが、なにもいえなかつた。タヅさんは、やけどを負ったシヨウタにもあえず、遺体もみつけれず、遺品さえも手にすることができなかつたのだ。タヅさんはつづけた。

「あいにくしてくれて、ありがとうね。シヨウタがくるしんでないならそれでええ。いっしょにいつてあげたいけど、まだいかしてもらえん。ゆるしてください」

タヅさんは、てのひらをあわせておがんだ。そして、リヨウタの手からつえをうけとると、ゆっくりと立ちあがった。

「タヅさん」

リヨウタは、あわててとめようとした。タヅさんは、ふりかえって笑った。

「そうよばれたのは、むかしのこと。おばあちゃんであえですよ」

タヅさんは、つえにすぎりながら、広場をよこぎって歩きだした。リヨウタは、すこしうしろをついて歩いた。まえを行くタヅさんの足もとが、やっとみえるくらいの明るさしかのこっていなかった。

しゃめんのスロープを、白い乗用車がくだってきた。河川敷までおりると、くるりとむきをかえてとまった。まぶしいひかりが目にとびこんでくる。

「リヨウタ」

助手席じょしゆせきからおりてきたレイがさげんだ。

ヘッドライトのなかにタヅさんとふたりならんで立ち、リヨウタは自分でも思いがけないことばを口にしていた。

「かあちゃん、さがしてくれてありがとう」

タヅさんは、しあわせそうなほえみをむけた。広場のむこうから、レイが、ゆっくりと歩いてきていた。

「車のむかえがきた。かあちゃんはあれに乗ってかえるから、ミノルさんといっしょに行きんさい」

そして、タヅさんはヘッドライトにむかつて歩きはじめた。

運転席うんてんせきからおりてきたひとが、タヅさんをいざなうように、後部座席ごぶせきのドアをひらいた。すれちがいざま、レイは、立ちどまってタヅさんをみまもる。ひらいたドアにタヅさんがむかうのをみとどけると、リヨウタのほうへ歩いてきた。

③「レイさん、はしってかえろう」

リヨウタは、土手のながい階段^{かいだん}をめざして広場をかけた。軽やかなレイの足音があとを追ってくる。リヨウタは、そのまま階段をかけのぼった。

75

なかほどでふりかえると、ちょうど、タヅさんに乗せた車がスロープをのぼるために階段のほうへむかつてターンした。リヨウタは、とつさに、しゃがみこんだ。スロープから階段がみえるかもしれない。タヅさんにみられてはいけないような気がしたのだ。追いついたレイが、おなじように、となりにしゃがみこんでいた。

ふたりは階段にならんですわり、車が土手道へあがるのをまつた。車が行って、しずかになるとレイはいった。

「どうして車に乗らなかったの」

80

リヨウタは、タヅさんののぞみをかなえてあげたかったのだ。でも、それが車に乗らないことかと問われると、よくわからなかった。ただ、レイを車に乗せてはいけないような気がしたのだった。

「タヅさんはぼくのことを、シヨウタさんだと思っていて、レイさんをみていったんです。ミノルさんといっしょに行けって」

レイは、はじかれたようにリヨウタの顔をみた。

「ミノルさんって、原爆で亡くなったひと」

「ぼくのおじいちゃんのおにいさんです。シヨウタさんの友だちでした」



リヨウタは、河川敷でのタヅさんと思った。「ミノルさんといっしょに行きんさい」と、いったときのタヅさんの顔は満^{まん}

85

足^{ぞく}そうで、とてもおだやかだった。

むこう岸の土手道をはしる車のヘッドライトが、川の瀬^せに反射^{はんしゃ}して星空のようにみえた。つめたい風がほほをなでていく。



「リヨウタのおかげね。ありがとう」

レイがぼつりといった。ひょうじょうくらくて表情はわからなかったけれど、やさしい声だった。

「でも、ぼく、うそをつきました。シヨウタかつてきかれて、シヨウタさんのふりをしました」

タヅさんは、リヨウタのうそに気づいていただろうか。

タヅさんは、すぐにわすれてしまうかもしれないけれど、リヨウタは、きょうのことをおぼえていてあげようと思った。あのと看、かわしたタヅさんとのやりとりは、タヅさんとリヨウタだけのひみつだった。

「うそつきは、わたしも共犯^{きょうはん}ね。ミノルさんのふり、しちゃったもの」

「あ。そうか、共犯者か。ごめんなさい」

そうこたえながらも、リヨウタは心が軽くなつていくのをかんじた。

階段ののこりをあがりながら、リヨウタはいつてみた。

「レイさんは、どうして車に乗らなかつたんですか。共犯者にならずにすんだのに」

「それは、リヨウタがきゆうに、はしりだしたから」

「狩^{しめり}獵^{よう}本能^{ほんのう}ですか。猫^{ねこ}みたいですね」

「ばかにして」

レイが笑う。リヨウタは、住^{じゅう}宅^{たく}地^ちのあかりにむかつてかけだした。レイの足音が追ってきた。

(西村すぐり『ぼくはうそをついた』より)

※1 ミノルさん…原爆で亡くなってしまった、リヨウタの祖父の兄。

※2 勤労奉仕先…シヨウタが働いていたところ。

問一

A

(3行目)には、体の一部を表す語句が入ります。その言葉を答えなさい。

問二

I

(19行目)と

II

(46行目)に入る語句の組み合わせとして、最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア

I

どんどん

II

ふらふら

イ

I

ずばずば

II

くらくら

ウ

I

おずおず

II

おろおろ

エ

I

だんだん

II

はらはら

オ

I

しぶしぶ

II

もじもじ

問三——線①「それでもかまわず、タヅさんはひざをついてリョウタの手をとった」(10行目)とありますが、この時の

タヅさんの心情を説明したものとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 拒こばまれたことで心がくじけそうになったが、息子への愛情をあらためて認識し直し、その愛情を手を通して力強く伝えようとしている。

イ 暗がりの中で突き飛ばされたので前後不覚になったが、リョウタの手が近くにあったので安心することができている。

ウ 突き放されたことで腰こしを痛めて泣き出しそうになったが、その腰の痛みよりも、息子との再会の喜びが大きく勝っている。

エ 息子と再会できたと喜んでいる時にその息子から突き飛ばされたことに驚おどろいたが、それでも息子を大切に思う気持ちには変わらず持ち続けている。

オ 息子から拒絶きよぜつされたことで心を痛めるが、ようやく息子と再会できたことを喜ぶとともに、長い間探し出せなかったことを申し訳なく思っている。

問四——線②「タヅさんのことばの意味」(46行目)とありますが、それはどのような意味ですか。説明しなさい。

問五

——線③「レイさん、はしってかえろう」(73行目)とありますが、この時のリョウタの様子を説明したものとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア タヅさんを家族のもとへ送り届けることができたことで安心し、その達成感をレイさんと分かち合いたいと思い一緒に走ろうとしている。

イ タヅさんに気を遣って嘘を重ねつけてしまったことを悔い、その後悔を全力で走ることでも紛らわせようとしている。

ウ 予定よりも早いレイの迎えを喜ぶとともに、ショウタのふりをしていたことがタヅさんに伝わらないように配慮している。

エ レイにリョウタと呼ばれたことで、タヅさんに嘘をついていたことがばれてしまったかもしれないと思い心配して早くこの場を離れようとしている。

オ レイをミノルと知っているタヅさんの気持ちを汲み、最後までその思い違いを保てるように気遣い、車に乗らないようにしている。

問六 ▼マーク（88行目～93行目）の間で使われている表現技法と同じ表現技法が使われているものを次より1つ選び、記号

で答えなさい。

ア 満で二十九歳さいになった六尺はゆうに越こすこの男は、あわてて眼をそらした。（中上健次「地の果て至上の時」）

イ 部屋の中が見えた。がらんとした荷物のない部屋。畳たたみ。（柴崎友香「寝ても覚めても」）

ウ 子供が、母としては一ばん好きな表情で、生涯しょうがい忘れ得ない美しい顔をして（岡本かの子「鮎」）

エ 日はうらかに川面かわもを射て、八畳の座敷は燃えるように照った。（谷崎潤一郎「刺青」）

オ 日本人は歴史の前ではただ運命じゅうめいに従順な子供であつたにすぎない（坂口安吾「墮落論」）

問七 ——— 線④「リヨウタは、住宅地のあかりにむかってかけだした」(108行目)とありますが、この時のリヨウタの心情

を説明したものとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア タヅさんのことを思い感傷にひたりながらも、レイにも嘘の共犯者になってもらえたので罪悪感が少しずつ^{うす}薄れ始めています。

イ タヅさんとのひみつを大切にしていこうと思いながらも負い目も感じていたが、レイとのやり取りが楽しくなったので気がまぎれている。

ウ タヅさんとシヨウタのふりをしながら接したことは大切なことだと思いう反面後ろめたさも感じていたが、レイと話す中でその後ろめたさが緩和している。

エ タヅさんに嘘がばれてしまっているかもしれないと不安になるが、レイも共犯者になってくれたのでその嘘はばれていないはずだと思い直している。

オ 今日のやり取りをタヅさんが忘れてしまっても、覚えていようと気負っていたが、やさしいレイからの語りかけによりその気持ちが軽くなっている。

問八 中学1年生のAさんのクラスでは、この本文を読んだ際、リヨウタの嘘をつくという振る舞いは正しかったのか話題に

なりました。その話題についてAさんは【資料】を参考にしながら考察をすることにし、【文章】を書きました。【文章】

の 1 に入るものは【資料】からぬき出し、 2 に入るものは自分で考えて答えなさい。

【資料】

※
ボクは「一般に無害と認められているうそでも、まったく正しい手段でその目的が達せられるなら、それは必要ではないのである」と述べています。相手を喜ばせるとか失礼のないようにするという目的には、嘘をついて相手を騙す以外のもっと良い手段があるかもしれないし、そうだとすれば、ボクの言うように、嘘をつく必要性はなくなるはずです。

(池田 喬『嘘をつく』とはどういうことか―哲学から考える―)

※ボク…シセラ・ボク。スウェーデン生まれの哲学者

【文章】

本文の中で、リヨウタはタツさんのためにうそを付いた。それは、亡くなってしまった息子であるシヨウタを探し続けるタツさんのことを思っている行為である。つまり、【資料】で述べられるところの、 1 があることになる。

それでは、ここで重要なのは嘘をつく以外に良い手段があったかどうかだ。私は、シヨウタが亡くなってしまったという状況を考えたとき、嘘をつく以外にタツさんを助けることはできなかったと考える。だからこそ、リヨウタの振る舞いは 2 といえる。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。）

広島市現代美術館をかわきりに東京、群馬、沖縄、長野、宮崎と日本各地をまわり、海外では上海、カナダ、イギリス、ドイツ、フランスと「ひろしま」^{※1}を展示してきた。

I アメリカでの展示や出版がなかなかうまくいかない。話はある前にも具体的になる前に流れてしまいか条件が合わずに私からおりるなど、何かスムーズに事が運ばず、停滞していた。過去においてヒロシマに関する展示はアメリカの歴史と風土からくる一方的な価値観と解釈が一般的であるから、アメリカでの「ひろしま」の展示や出版はうまくいかないのは当然といえる。それにしても II、「ひろしま」をアメリカで発表したいと思う気持ちも自然であり当然である。

写真は一枚の紙の上にプリントされたものだから破けば簡単に紙くずになってしまうような、どこか危うい軽さと、その逆に印画紙の上に過去や現在や未来までもを見通すことの出来る強度のある像をプリントしているともいえる。

そんな写真のヒロシマは見る側にとっては過激で危険が伴う。見たくない過去がそこにあるのだから。ヒロシマという響きは人を不安にさせる。ふれたくない、見たくない、忘れない。過剰で残酷で野蛮な人類史上最悪な負の遺産であるから、わざわざヒロシマを展示して、足を運んで見に行くなんて出来るはずがない。私もそんな感じで二〇〇七年まで生きてきた。

外国では日本の国すべて、日本人の全体が受けた被害としての原爆であると考えている。しかし実際の日本では広島市と長崎市という地方の中に集約させて、他人事でしかない現実は今でも変わらない。

高校時代、図書館で土門拳^{※2}の『ヒロシマ』の写真集をみた。その時の衝撃は大きく、最後まで見ることが出来ずに本を15

としてしまった。何かイヤなものをみてしまったような、気持ちがざわついて気分が悪くなったのである。それ以来広島が遠く離れてしまい、自分から広島について話すことはほとんどなかった。その『ヒロシマ』の写真集が日本において撮影者の名前が前面に印されたヒロシマ写真のはじまりである。

写真は眼の前にある、眼に映るすべてのの中から撮影者が意図的に選んだ、特定された現実の複写である。写真家の思いがすべて写真に反映されるものだから、彼の思想が写しだされている。その写真にどのような言葉をそえて、どんな装丁^{そうてい}をほどこすかによって、見る側を選別する。そして写真家が生きた時代の空気が確実に写し込まれ、時代の証言者としての役割をはたしている。写真は記録するためにあり、社会に伝える使命を負わされているのだ。カメラの前の現実を眼で見た証^{しょう}として機能する。

だからこそ一度見たら忘れられない写真があり、二度と見たくない写真もある。見た人に何らかの影響を与える。それはまさにヒロシマの写真だから。

広島での一九四五年八月六日午前八時十五分以後の惨状^{さんじょう}は、確かに写真を見れば記録されているが、見たような気になってもすぐに忘れてしまう。それは広島に対する現実感がまったくないからだ。想像力をかき立てるイメージがそれらの写真から立ち上がってこなかった。自分の身に降りかかったことではないので痛みを感じられない。ただ自分の身の上の出来事など、ほんのささいな事がらでしかないので、身の内でない他者を知る、外側を感知することによって、自分の小さな器をこわして世界と関係をもつキッカケとして、広島での撮影は私に新しい想像力を与えてくれたのである。私が広島に何かで30

きることがあるとすれば、想像することぐらいだ。

広島で被爆ひばくされた方から初めて一九四五年八月六日当日の話をうかがう機会があった。その日の朝の出来事をきのうの事のように、私の知らない現場の在り様を静かな口調で一時間ほど話された。そしてフーツと息を飲み込み、なぜあの時みんなと一緒に死ななかったのか……とつぶやいたのである。一方的に彼女の話を聞いていた私は初めて口を開き、あなたが生きていたから、その時の話を聞くことが出来たのですよ。こんな普通の言葉しか返せなかったが、その時、被爆したことは35被爆した人しかわからない切実な思いが心に染しみて、この瞬間に広島との関係が現実として私の身体の一部に何の抵抗ていこうもなくストンと入った気がした。

私の父方は千葉県成田市の新勝寺しんしょうじ参道で料亭を営む家系で東京育ちである。母方は群馬県新田郡にった（現みどり市）の農家の出だ。両親とも生粋きっすいの関東人である。西の方面にはまったく親戚縁者しんせきえんじやはなく、高校の修学旅行で京都、奈良、別府、長崎と駆け足で回っただけでほとんど何も覚えておらず、関西以西に興味をもつこともなく過ぎていた。

もともと旅が苦手で観光旅行はほとんどしない。日本の土地は写真の仕事があった場所のみなので行っただけのことのない土地の方が多おほいい。それが広島については、今までの様子と少しずつ変わっていく。それまで無縁の土地だった広島が近くに感かんじられる。天気予報は広島が気になり必ずチェックする。毎年一度から二度、原爆資料館に撮影に出かける。戦後七十年がたつ今でも新しく遺品きざうが寄贈されているからだ。

その遺品たちは私がくるのを待っていてくれたように姿を現し、戦後という時間の塊かたまりになって、硬かたくたたまれているセーラー服※3をトレーシングペーパーの上にひろげる。時間にしばられているセーラー服に空気を入れ、形を整ととのえて透明人間に

なった彼女を想像しながら、このセーラー服が仕立てられて彼女が初めて袖を通したその日を想いながら、シャッターを押す。たった一人の見知らぬ少女に会いに広島へ今年も出かける。

彼女の肉体は原爆に焼かれ、跡形もなくなくなってしまったのか、はつきりわからない。いまだに行方不明の少女は自分の着ていたセーラー服やスカートやワンピースを決して忘れていない。私がもう一度、美しい仕立ておろしの時のように写しとり、彼女の喜ぶ姿を想いうかべる。

③ こんな風に私の「ひろしま」は写真に撮り、プリントして、額に入れ、なるべくシンプルに余分な文字はなく、ただ額装した写真があるだけだ。サイズは108センチ×74センチと普通の写真よりもはるかに大きい。この上のサイズは158センチ×100センチである。すべてフィルムでの撮影でデジタルカメラではないので、その場で写っているものをみることは出来ない。ちゃんと写っているのかどうか不安ではあるが、かえってフィルム特有の緊張感と距離があつて私に向いている。フィルムは現像され、すべて同時プリントで上がり、ハガキサイズのプリントをチェックする。すると思わぬ写真がたくさん出来上がっている。こんな風に撮影現場があつたのかと、プリントをみて発見する事が多い。

広島で撮影する写真はすべて七十年前の歴史の資料として原爆資料館に収められている品々だ。無機的に資料と呼ばれる、個人の持ち物であつた洋服や靴や靴下、時計、眼鏡、指輪、くし、そして入れ歯。誰とも知れない広島にあの日にあった人々が身に付けていた品物たちと、家にしまわれていた品々を、今や私の身体の一部をつかさどるもののような感覚で撮り続けている。

ヒロシマとカタカナ文字で発表された写真の基本はモノクロームである。モノクロームの黒と白はメッセージの意志が写

真に漂う^{ただよ}。写されたその時代を見事に反映していて、それがいわゆる写真の王道である。そのように写されたヒロシマの写真の歴史は確実に大きな役割をはたし評価されるものである。その文脈の中から、良くも悪くも私の「ひろしま」が生まれたとと言える。初めてみた土門拳の「ヒロシマ」の呪縛^{※4}が少しずつ溶けてゆき、私は自由に「ひろしま」を撮影して発表する。65

念願だったアメリカでの展示と出版が急転直下決まり、ニューヨークで「Here and Now: Atomic Bomb Artifacts ひろしま/Hiroshima 1945/2007」が生まれた。あんなにやりたいと思っていたときにはできずに、忘れかけていた時に声をかけられたのだ。久しぶりにニューヨークへ、個展のオープニングと写真集のサイン会に出かけた。アメリカ、ニューヨークでの「ひろしま」は私が力を入れていた思いよりも自然に自由に受け入れられたと感じる。そして何よりもひらがなの「ひろしま」の文字が英語の中に印字されている。男たちのカタカナのヒロシマから解放されて「ひろしま」の女文字は⁵その美しい姿を全世界に向けて表明したのだった。

(石内都『写真関係』より)

- ※1 「ひろしま」…写真家である筆者が、被爆者の遺品を撮影したシリーズのこと。^{さつえい}
- ※2 土門拳…山形県酒田市出身の写真家。代表作に『ヒロシマ』『筑豊のこどもたち』などがある。^{ちくほう}
- ※3 トレーシングペーパー…複写するために使用される透明な用紙のこと。^{とうめい}
- ※4 呪縛…人の自由をしばること。

問一 I (2行目) と II (5行目) に入る言葉として、最適なものを次よりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア むしろ イ しかし ウ したがって エ また オ やはり カ つまり

問二 〓 線「出版」(2行目) と同じ構成の漢字を次より1つ選び、記号で答えなさい。

ア 個性 イ 不可 ウ 国立 エ 上下 オ 求人

問三 〓 線①「他人事でしかない現実」(14行目) とありますが、なぜ「他人事」として捉えられるのでしょうか。その

ことを説明したものとして、最適なものを次より2つ選び、記号で答えなさい。

ア 原爆の体験は、広島や長崎といった地方だけに担^{にな}わせようとしてしまったから。

イ 原爆の体験は、残酷なうえ日常とかけ離れたものであり想像することしかできないものだから。

ウ 原爆の体験は、直接体験することができないうえ身近にその体験をした人が存在しないから。

エ 原爆の体験は、被爆された方の語りがなければ決して理解することができないものだから。

オ 原爆の体験は、誰もがふれたくない負の遺産として人々が取り扱^{あつか}ってしまっている現状があるから。

問四

——線②「それまで無縁の土地だった広島が近くに感じられる」（42行目）とありますが、それはなぜですか。その理由を説明したものとして、最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 関西に縁^{えん}もゆかりもなかったが、広島へと足を運ぶ中で広島への想像力が具体的に持てるようになったから。

イ 私の知らない原爆投下後の現場のありようを初めて知り、写真を通してしか知ることができなかった現実を知れたから。

ウ 広島で被爆された方の体験談と切実な言葉を聞き、その言葉によって広島に対する現実感を持てるようになったから。

エ 旅が苦手で観光旅行をほとんどしなかったが、何度も広島に通う中で天気予報を確認するほど身近な場所になったから。

オ 知ったような気になっていた広島だったが、被爆された方の話を聞くことで広島の詳細^{しょうさい}を初めて知ることができたから。

問五 ——— 線③「こんな風」(52行目)とありますが、そのことを説明したものとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 長い時間によって古びてしまいそうになった遺品たちを、それを所持していた人たちがどのように使っていたのかを再現するようにしているということ。

イ 遺品をかつて使用していたであろう人を想像することで、遺品に積み重なった時間を解きほぐしその遺品を生き残ったものとする事。

ウ 遺品をぞんざいに扱わずひとつひとつ丁寧に扱い、その遺品を大切にしていた人たちの気持ちに思いをはせるようにすること。

エ 遺品をしばらくつけてしまった戦後という時間を忘れ、使用者の姿を想像することでその遺品本来の時間を取り戻すようにすること。

オ 誰かの日常にとって大切なものであったということを意識し、遺品を遺品としてではなく生活必需品^{ひつじゅひん}として扱うようにすること。

問六 ——— 線④「初めてみた土門拳の『ヒロシマ』の呪縛」(65行目)とはどういうものですか。50字以内で説明しなさい。

問七 ———線⑤「『ひろしま』の女文字はその美しい姿を全世界に向けて表明した」(70行目)とは、どういうことですか。

そのことを説明したのとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 写真集のタイトルを平仮名で表記することによって、モノクロで男性的なイメージの文脈を持つ「ヒロシマ」から解放されたということ。

イ 写真集のタイトルを平仮名で表記することによって、これまで男性的な表現に縛られてきたヒロシマのイメージから脱却できたということ。

ウ 写真集のタイトルを平仮名で表記することによって、女性が主体となって表現したものが世界に初めて受けられることができたということ。

エ 写真集のタイトルを平仮名で表記することによって、硬質でどこか近寄りがたかった広島イメージを女性的なイメージに更新できたということ。

オ 写真集のタイトルを平仮名で表記することによって、世界から見落とされてしまった広島像を思惑通り提示することができたということ。

問八 本文の中で「写真」とはどのようなものであると言われていますか。本文全体の内容を踏まえて60字以内で説明しなさい。

問九 戦後八十年が過ぎ、戦争体験を語れる人は徐々に少なくなっています。一方で、「資料」や「遺品」といった「物」は

今後に残り続けます。そうした状況の中で、戦争を忘れないために「物」が果たす役割はこの先重要になっていくでしょう。重要と思う場合は、その理由も含めてあなたの考えを100字以内で書きなさい。重要でないと思う場合は、他にどのようなことが重要だと考えるか、あなたの考えを100字以内で書きなさい。

